

A・MUSEUM

vol.65
[2010.12.15]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



北斗七星としし座流星群 (2001年11月19日 加波山にて撮影)

流星・火球・隕石

空気が澄み、星がきれいにみえる季節になりました。冬の空は澄んでいるだけでなく、明るい星が多いため、とても華やかです。その星空にアクセントをつけるように「流星」が現れることがあります。これは宇宙を漂う粒子が地球に飛び込み、大気との摩擦で発光する現象です。その粒子は大きくても数mm程度で、正体は彗星から放出されたチリなどです。チリが多く漂う彗星の軌道を地球が横切るときに、たくさんの流星が出現する「流星群」がおきることがあります。粒子が数cm大になると金星ほどの明るさで発光し「火球」とよばれます。通常、これらは大気中で燃え尽きますが、燃え尽きずに地表まで達したものが「隕石」で、これはおもに小惑星の破片などです。 (教育課 木村正和)



坂東市に落ちた神大実隕石 (レプリカ) 第1展示室に展示中

第6回
市民コレクション展

シェルコレ2011 ー貝の世界ー

当館では2002年以来、これまで、チョウ、石、化石、魚拓、バードカービングと、さまざまな分野で市民参加型の展示「市民コレクション展」を開催してきました。第6回目となる今回のテーマは「貝」です。貝は古くから人々にとって身近な生きもので、生活のなかでいろいろな形で利用されてきました。特に形態や色彩に富んだ貝殻は、世界各地で装飾品や工芸品などに使われ、現在でも多くのコレクターたちの心をとらえてやみません。

今回の市民コレクション展では、貝殻の展示をとおして古来から人々を魅了し続けてきた貝のもつ魅力に迫っていきます。展示の中心のひとつは当館所蔵のコレクションや茨城県に縁のあるコレクターの方々が、趣味や研究のために収集したコレクション群です。コレクションそのものだけでなく、コレクターの方々にも焦点をあてて、収集に至ったきっかけや貝の収集の楽しさなども紹介していきます。もうひとつは貝殻でつくったシェルクラフトの作品群です。これらの作品をとおして、多様で美しい貝殻の形やその色の不思議さを、より強く感じ取っていただけるのではないかと思います。

また、開催にあたり一般の方々から思い出の貝や貝殻でつくった作品などを募集しました。化石掘りでみつけた貝の化石、地元の海辺でみつけた珍しい貝殻、拾った貝殻でつくった美しい作品など、とっておきの一品をそれにつわる思い出を添えて展示します。発見した時の新鮮な喜びや身近な自然の素材でつくれる作品の楽しさを多くの方々に知っていただければと思います。そのほか、貝に興味のある当館のジュニア学芸員と一緒に、茨城県内のいくつかの海岸を歩き、浜辺に打ち上がっている貝殻の収集を試みました。これらの活動のようすや結果もジュニア学芸員のコメントとともに紹介します。(資料課 池澤広美)



明治時代に収集された茨城の海産貝類 (所蔵：日立市郷土博物館)



貝殻でつくったフラワーアレンジメント (提供：阿部正之氏)



ジュニア学芸員の活動のようす (茨城県内の海辺の打ち上げ貝調査)

会 期 2011年1月29日(土)~2011年2月20日(日)

開館時間 午前9時30分~午後5時まで
(入館は午後4時30分まで)

休 館 日 毎週月曜日

●記念イベント「貝殻図鑑をつくろう」

日時：2011年2月5日(土) 10:30~12:00

場所：博物館内

対象：小学生以上 (小学生は保護者同伴)

定員：30名 (抽選)

内容：海岸に打ち上がったいろいろな貝殻を使って、貝殻図鑑をつくります

講師：秋山章男氏(九十九里浜自然誌博物館主宰)



貝殻図鑑のイメージ



(所蔵：秋山章男氏)

クマの保全から生物多様性を考える

～国際生物多様性年3～

今年の秋は、本州各地でツキノワグマが人里に出没しています。これまでに多くの方がケガをし、また一方のツキノワグマも2,000頭以上が捕殺される結果となっています。残念なことに、最近私たちが接するツキノワグマやヒグマに関する報道のほとんどは、こうしたクマにとってマイナスのイメージになります。しかし、本来クマ類は、多様で豊かな自然環境を象徴する種といえ、キーストーン種、あるいはアンブレラ種などともよばれています。クマ類が安定して生活できる環境は、ほかのさまざまな生物種にとっても好ましい環境といえるからです。そこで、10月に名古屋で開催されたCOP10を機会に、クマ類の本当の姿とその現状についてもっと知ってもらうため、次の二つのイベントを私が代表を務めている日本クマネットワーク (<http://www.japanbear.org/cms/>) が開催しました。

COP10パートナーシップ事業への参加

この事業の一環として、「クマの保全から生物多様性を考える」というシンポジウムを、10月3日に東京大学農学部で開催しました。5人の演者による日本のクマ類の現状についての話題提供に続いて、カナダ・アルバート大学教授のデロシュア博士に、「冰山もホッキョクグマも融けて縮んじゃうって？ー地球温暖化

のホッキョクグマへの影響ー」という演題で講演をいただきました。肉食や氷上での生活に特化したホッキョクグマの生態と、またその未来に暗雲を漂わせている温暖化の影響を、素晴らしい写真の数々とともに紹介いただきました。「この美しく巨大な生きものを保全するためには、次に世代を担う子どもたちが地球環境についてどのように考え、行動してくれるかにかかっている」という博士の言葉は印象的でした。

COP10生物多様性交流フェアへの出展

また、10月23日から29日までの期間、本会議場に隣接する特設会場にブースを出展しました。日本のクマ類と生物多様性の関わりと、絶滅のおそれのあるツキノワグマ個体群の保護活動の取り組みについて紹介する写真パネルの展示や、クマ・トランクキットを用いた教育プログラムの実演などを行いました。会期中は多くの来場者があり、特にクマ類の教育プログラムに入っている骨格標本や毛皮標本は大人気を集めていました。また、会期にあわせて作成した英語版・日本語版のパンフレットも好評でした。会場には、政府関係機関、自治体、環境NGOや、環境問題に取り組んでいる企業などが100以上も出展しており、参加者と活発な意見交換を繰り広げていました。（教育課 山崎晃司）



シンポジウムで講演するデロシュア博士



日本クマネットワーク (JBN) のロゴ



交流フェアでのブース風景

続・筑波山

筑波山は噴火によりできた火山と
思っている方は多いのではないで
しょうか。じつは筑波山に火山はな
く、長い歴史のなかで地層の隆起と侵食
によって現在の姿になったものです。
山の本体は侵食にも耐えた硬い斑れ
い岩でできていますが、標高が低い
山麓部は脆い花崗岩でできています。
また、筑波山は関東平野に孤立した
独立峰と考えている方もいるのでは
ないでしょうか。筑波山は八溝山地
の一部で、その最南端に位置してい

ます。
県民の皆さんには山の存在が身近
すぎてお気づきにならないかもしれ
ませんが、ぜひ当館の「筑波山展」を
ご覧頂きその素晴らしさを確認く
ださい。筑波山は茨城人が古来より
朝な夕なに仰ぎ天気を占い豊穡を祈
願し、時には歌を詠んだ文化の山で
もあります。そのなかで山全体が信
仰の対象とされ手厚く保護されてき
たため、貴重な自然も残されていま
す。また、近年はつくばエクスプレ

コラム by director SUGAYA

スの開通で交通の利便性が一層高ま
り、県内はもとより全国から多くの
方が登山に訪れております。これを
機に筑波山の自然、茨城の魅力が再
認識されることを期待しております。



筑波山神社の拝殿

つくば隕石の記録～15年前をたどって～

～研究ノート1～

国内でこれまでに発見された50の隕石のうち、茨城県で記録されたものは二つあります。ひとつは1915年頃に猿島郡神大実村（現坂東市）に落下した神大実隕石、そしてもうひとつが「つくば隕石」です。

1996年1月7日16時20分頃、つくば隕石は南西方向からやって来ました。上空で火球となっている姿や破裂した瞬間を多くの人が目撃し、隕石シャワーとなってつくば市やその周辺に降り注ぎました。その後つくば隕石は23地点で破片として発見され、1号から23号とされました。落下した隕石は総重量が800g以上あり、岩石質の「石質隕石」の「普通コンドライト」に分類されています。

つくば隕石は多くの報道などにも取り上げられ、当時つくば市周辺はつくば隕石フィーバーに包まれました。それから約15年が経過してその記憶が薄れつつある今、つくば隕石落下の記憶を記録として残すことにはとても大きな意義があります。盛り上がった当時では出てこなかったり埋もれてしまったりした情報も、現在ならばもしかしたら出てくるかもしれません。そこで、つくば隕石を発見した方々に調査協力を依頼し、何人かの方々に直接お話をうかがうことができました。そのうちの2例を紹介します。

牛久市在住の鈴木常夫さんは、その日の夕方、自宅の敷地内にある小屋のそばにいました。空をふと見上げると、普段飛んでいる飛行機とは違うようすで光っている物体を見つけました。その後、小屋に「カランカラン」と何かが落ちたような音を聞きました。その時はそのままにしていたが、夜のニュースをみて近くに隕石が落ちたことを知り、翌朝、自宅の敷地内をよく探してみました。すると、小屋のすぐ隣にあるビニールハウスの屋根が一部破れ、ハウス内に落下していた表面の一部が黒い石を見つけました。音がした小屋の周辺も探しましたが、そちらではとうとう何も

みつかりませんでした。その後、拾った石を近くの研究機関に持ち込んだところ、つくば隕石と確認、8号とされました。鈴木さんが発見した隕石は、大きさが約2.5cm、重さが約5gです。

鈴木さんの奥さんのお父さんである池辺琢之さんも、つくば隕石の発見者です。池辺さんは、娘さん夫婦が拾った隕石をみせてもらっていたため、その特徴をよく把握していました。池辺さんはつくば市内の洞峰公園によく散歩に行っていました。娘さんから「どうせ散歩するんだったら、下をみて隕石でも探しながら散歩したら」と言われていました。そこで下をよくみながら散歩していたところ、公園の駐車場付近で本当に隕石をみつけ出しました（つくば隕石10号）。池辺さんは同じ場所でいずれも10号とされている合計三つの破片を発見しています。なお、そのうちのひとつが自宅そばの阿見町立本郷小学校に寄贈され、現在も大切に保管されています。

当館では、つくば隕石やその落下、発見などにまつわるさまざまな記録を、2011年3月12日から開催される第51回企画展「46億年の旅路の果てに一隕石がみてきたもの」のなかで紹介する予定です。ご期待ください。（教育課 赤羽岳彦）



阿見町立本郷小学校に保管されているつくば隕石10号

幸せを告げる雪うさぎ

雪が降ったあと、みなさんは「雪うさぎ」をつくったことはありますか。雪うさぎの目にはふつう、ある植物の赤い果実を使いますが、この植物の名前をご存じでしょうか。

当館野外にはガマズミやアオキなど赤い果実をつける植物が多くありますが、そのなかで、雪うさぎの目にはナンテンという木の果実を使います。ナンテンはメギ科の常緑低木で高さは2m程度、初夏に白く小さい花を咲かせ、秋から冬にかけて赤

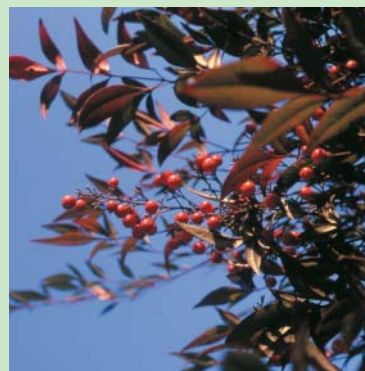
い球形の果実をつけます。

ナンテンは古くから人々の生活に役立ち、果実は咳止めの薬に、防腐作用のある葉はお赤飯の飾りなどに用いられてきました。また、音が「難を転じる」に通ずることから縁起が良いとされ、フクジュソウとあわせて「災い転じて福となす」といわれています。

真っ赤な目の雪うさぎをみかけたら、それは貴方に幸せの訪れを告げているのかもしれないね。

小さな発見ーミュージアムコンパニオンー

(ミュージアムコンパニオン 小菅宏美)



ナンテンの赤い果実

「モアイの島」 イースター島の皆既日食

～研究ノート2～

7月11日午後（日本時間7月12日早朝）に、南太平洋から南アメリカ南端のパタゴニアにかけて皆既日食がみられました。皆既帯の大半が洋上のため、地上で観測できる場所は、マンガイア島（クック諸島）、ハオ島（ツアモツ諸島）、イースター島（チリ）、カラファテ（アルゼンチン）に限られていました。今回、私はイースター島の日食観測ツアーに参加しました。ここでは、雲が多く天気が変わりやすいというリスクはありますが、皆既時の太陽の高度が高く、また、モアイ頭上での日食という独自の構図が可能です。

イースター島は、ハワイ諸島と同様、ホットスポット上の海底火山として誕生したおもに玄武岩からできています。凝灰岩の分布するラノ・ララクではかつてモアイが製作されていました。島は三つの火山を頂点とする三角形をしています。島の大部分は最高峰のテラヴァカ山（標高507m）の噴出物からできています。

日食観測のため、イースター島には世界各国から約4,000人が訪れました。私たちのグループ16人は、7月7日午後に成田を発ち、アトランタ、サンチャゴを経由して9日深夜にイースター島に到着しました。10日には島内各地の下見を行い、皆既帯の中心に近いこととアフ・ナウ・ナウのモアイがあることから、観測地

を北部のアナケナ・ビーチとしました。いよいよ当日の11日、観測地で各自が観測機材の設置・調整を行い、観測・写真撮影に備えました。前日午後から未明までの雨とセッティングまでのスコールや強風などに一抹の不安を抱えながら日食のはじまりを待っていました。

12時41分に太陽が左下から欠けはじめ、皆既日食の幕が上がりました。この頃から風は少し残っていたものの、雲は消えほぼ快晴となりました。食が徐々に進み、14時8分過ぎにダイヤモンドリングを経てモアイ像の上に黒い太陽とコロナが姿を現すと、数百人の観測者から一斉に歓声があがり起こりました。皆既が継続した約4分30秒間、太陽の右上と左下にのびる白く輝くコロナがよくみえました。また、この間、うす暗くなった空にシリウス、プロキオン、金星、水星も姿をみせてくれましたが、前回の中国での日食より空が明るかったことや日食夕焼けがみえなかったことも印象的でした。15時35分太陽が元に戻り、観測が終了しました。唯一の心残りは皆既終了間際に薄雲が太陽を隠し2回目のダイヤモンドリングがみえなかったことでした。機材の撤収後、参加者一同モアイとみた皆既日食観測成功の感慨に浸りつつ宿舎に戻りました。

（資料課 細谷正夫）



製作後放置されたモアイ（イースター島のラノ・ララク）



皆既中のコロナ（イースター島のアナケナ・ビーチ）

冬が旬です!!

皆さんは“寒ボラ”を知っていますか。ボラと言えば卵巣を加工した「カラスミ」が有名です。しかし、冬に漁獲されるボラは刺身にしても絶品なのです！当館でも、その旬な魚であるボラを展示中です。

水槽にいる個体は体長約15cmですが、大きくなると80cmほどまで成長します。水槽のなかでは、1日中口をパクパクさせて泳ぎまわっています。何をしていますか。じつは餌を食べているのです。自然

界では海底の泥のなかの小動物や有機物、藻類、水面を漂うタンパク質などを濾し取って食べています。当館では朝と夕方に餌を与えていますが、その時間以外は水面に浮かんでいる餌の残りを食べているためこのような行動をとります。決して息苦しいからではありませんよ!!

食材にはまだほど遠いサイズですが、水槽をにぎやかに泳ぐ、成長が楽しみな魚です。

（水系担当 廣瀬南帆）

おさかな通信



水面の餌を食べるボラ

齊藤隆コレクション～世界の砂～

～収蔵品紹介～

千葉県野田市在住の齊藤隆氏より、10月に海岸砂の標本155点、砂漠砂標本54点、化石標本6点が寄贈されました。これらの砂のコレクションは、約20年をかけて採集・整理・保存していた日本国内及び国外28か国にわたるものです。採集場所や日付によって整理されているだけでなく、採集当時の現地ようすが写真ファイルとしても残されており、さらに砂の標本すべてについて、顕微鏡による拡大写真も添えられているため、その価値も大変高い貴重な資料です。

齊藤氏は大学で地質学を専攻し、その後、石油資源関連の仕事をしてきた経歴があり、海外出張も多かったそうです。海に行くことが好きで、出張の際、海岸を訪れ、思いがけず美しい砂に出会ったときにはそれを採集していました。国内でも、千葉、茨城、福島などの海岸へ月に一度は行こうと心がけていました。こうして砂の収集がはじまりました。やがて海岸だけでは満足せず、砂漠にも手を広げるようになりました。齊藤氏は、中国のタクラマカン砂漠やトルクメニスタンのカラクム砂漠などの砂も採集しています。また、そういった話を周りにすると、砂のサンプルを届けてくれる人も現れ、サハリンのオプト海岸やサハラ砂漠の砂など、徐々にコレクションが増えていきました。

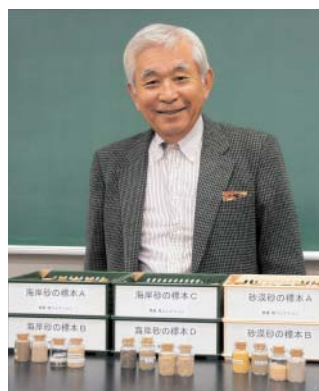
齊藤氏によると、「人相や手相のように、砂には砂の相がある」そうです。今回寄贈された標本も、それぞれ違った個性を持ち、輝いています。これらの一部

は、11月よりトピックスコーナーに展示されています。さまざまな砂の表情をのぞいてみてください。

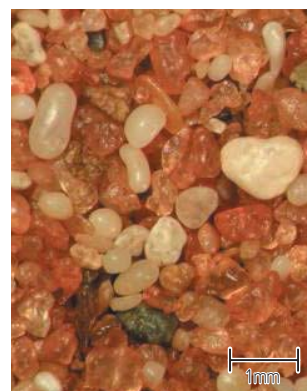
(資料課 永瀬卓也)



齊藤氏が砂を収集したアラブ首長国連邦 ルブアルハリ砂漠



砂の寄贈者：齊藤隆氏



砂漠の砂

霞ヶ浦のワカサギ

～季節の話題～

冬のこの時期、ワカサギは私たちを楽しませてくれる魚のひとつです。冬のワカサギといえば、諏訪湖や山中湖で凍った湖面に穴を開けて釣る「穴釣り」が有名ですが、凍らない県内の川や湖でも静かな盛期を迎えています。ワカサギたちの名産地の霞ヶ浦では1～2月の産卵期を間近に控え、食欲も旺盛なようです。江戸時代の本草学者貝原益軒の『大和本草』には「冬至以後は味劣る」とありますが、これは卵形成によ



採卵を待つワカサギ



人工授精させたワカサギ卵の着床作業

て身に栄養がまわらなくなるからでしょうか。しかし、卵がびっしりと詰まったワカサギもまた格別です。霞ヶ浦では1月21日～2月末日の間は、資源保護のため禁漁になり、残念ながらこのようなワカサギにはお目にかかれなくなります。あわせて約100年前に茨城からはじまった人工採卵孵化事業が沿岸の漁業関係者によって行われます。昨年は、近年希にみる豊漁でした。さて、今年はどうでしょうか。(資料課 増子勝男)

トピックス

○筑波山まるかじり

10月17日（日）に、企画展記念イベント「筑波山まるかじり」を、筑波山の山頂付近で実施しました。午前中は、男体山頂から自然研究路を一周し、午後は女体山頂に登りました。アサギマダラやトビナナフシ、サラシナショウマ、ダイヤモンドソウ及び色が異なる男体山と女体山の斑れい岩などを観察しました。当館の学芸員3人がそれぞれ動物、植物、地学分野の講師となり、筑波山の特徴ある自然について説明しました。参加者からは、「植物、動物、地学の三つの分野からそれぞれポイントごとに説明を聞くことができ、まさに筑波山まるかじりの内容で、とてもよかった」「筑波山が火山ではなく残丘であるとのことにはびっくりしました。また、筑波山特有の植物や虫もたくさんいることをはじめて知りました」「今日教えていただいたことを忘れないうちに企画展をみてみたい」などの感想が寄せられました。

参加者は筑波山の自然の豊かさにふれ、充実した秋の一日を過ごされたようです。（資料課 小松崎 茂）



「筑波山まるかじり」で奇岩の解説をする小池学芸員

○菅生沼エコアップ大作戦！が開催されました

11月6日（土）に、「菅生沼エコアップ大作戦！」を実施しました。

当日は秋晴れに恵まれ、朝早くから地元の団体や学校から県外の方まで合計155名が集まりました。

映像ホールで菅生沼に関するレクチャーを行った後、10時から現地でのゴミ拾いを開始しました。今年あまり増水しなかったため、ふれあい橋、あすなる橋付近では「ゴミが少ない」といった声も聞かれました。それでも、橋の上流側にある棧橋付近に大量のゴミがたまっていたなど、結果的には2トントラック3台分を皆さんで集めました。ゴミ搬出後、地元の七郷小学校児童が、環境活動の一環としてみんなで作った「シードロ」とよばれる、植物の種が入った泥の人形を参加者に配布しました。皆さんからは「たまっていたゴミが少なくなっていくのが気持ちよかった」などの感想をいただきました。

実施当初より搬出量が減ってきたとはいえ、依然として、菅生沼にゴミが流入している状況は続いています。当館では、来年以降も皆さんのご協力を頂きながらエコアップ大作戦を続けていきます。この活動を機に、身近な自然環境について改めて考えて頂けると幸いです。（企画課 富永敬之）



エコアップ大作戦で集められた大量のゴミ

○おいしいお米と野菜をどうぞ

11月13日は茨城県民の日であり、どなたでも当館の入場が無料となるサイエンスデー「茨城・科学の日」でもあります。そしてさらに、今年で16回目を迎えた当館の誕生日でもあるのです。

そんなおめでたい日に、当館がある坂東市大崎地区婦人部の皆さんが、当館と地元生産者の温かい気持ちをたくさんの人に伝えたいと、おいしいお米と野菜を持ってかけつけてくれました。

当日は、駐車場を開門した8時30分より、朝早くからいらっしやっただお客様約250組に、小袋に入ったお米とレタスやネギなどの野菜をお渡しすることができました。プレゼントを手にしたお客様からは、「早起するといいいことがあるのね」「地元の方と仲良くやっているっていいですね」などの感想をいただきました。

当館ではこれからも地元の皆さんとお互いに協力しあって環境保護活動や楽しいイベントを行うことにより、自然との共生、市民との協働を図っていききたいと思えます。（企画課 石川 悟）



プレゼントを渡す地元婦人部の方々

ガマの油売り口上 聞いてみませんか！



ガマの油売り口上を行う第19代永井兵助を襲名している筑波山ガマ口上保存会の吉岡久子氏

第50回企画展「筑波山一ブナとガマと岩と一」記念イベントとして、ガマの油売り口上の実演を、筑波山ガマ口上保存会の協力により、企画展開催中の毎週日曜日の午後1時と2時に実施しています。

「さあーさあーお立ち合い。ご用とお急ぎでない方はゆっくりと聞いておいで」ではじまるこの口上は、江戸中期に、縁日や祭で香具師たちが、筑波山などでつくられたガマの油を口上により売られるようになったのがはじまりとされています。

ガマの油売り口上は、まず、ガマガエルを周囲が鏡になっている箱に入れた後、自らの姿をみたガマガエルが油汗を出しはじめるようすを「鏡に写る己の姿の醜さにびっくり仰天いたしまして、御体から油汗をばたらーりたらーり流します」とうたいます。そして「ガマの油」とはその油汗を集め、煮つめて膏薬油としたといいます。続いて、刀の切れ味を示す口上がはじまります。半紙大の和紙を二つ折りにして、「一枚

が二枚、二枚が四枚、四枚が八枚、八枚が十六枚…」とうたい、和紙を半折りして徐々に小さく切っていきます。紙を小さく切ることによって刀の切れ味を示し、その紙片を紙吹雪のように吹き飛ばして、華やかさを演出します。刀の切れ味の後は効能の口上です。自らの二の腕に刃を当ててつけた切り傷に、ガマの油を塗り、血を止めるのです。

皆さんも、熟練した口上士たちの巧みな実演を当館でご覧になってみませんか。「さあ、どうだ。ご用とお急ぎがあってもなくても遠慮は無用。博物館へどしどしおいで！」
(教育課 湯本勝洋)

編集後記

今年は、「小惑星探査機はやぶさ」が大きな話題となりました。博物館でも3月から宇宙のロマンを取り上げた企画展「46億年の旅路の果てにー隕石がみえたものー」を開催しますのでお楽しみに。

さて、その前に年末年始、もっと身近な旅路にでも出発したいものです。皆さんはどのように過ごされますか。来年も皆さんと博物館にとって良い年でありますように。(T.T)

【交通案内】



＜車ご利用の場合＞

- 常磐自動車道谷和原ICから20分
- ＜鉄道・バスご利用の場合＞
- つくばエクスプレス守谷駅下車
～関東鉄道バス「岩井行き」又は「猿島行き」乗車
～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
- 東武野田線愛宕駅下車
～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車
～「自然博物館入口」下車、徒歩10分



【開館時間】

午前9時30分から
午後5時まで
(入館は4時30分まで)
※ベッド及び遊具等のお持ち込みはご遠慮ください。

【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設のみ	年間パスポート
	企画展開催時	通常時		
大人	720円 (580円)	520円 (420円)	200円 (100円)	1,500円
高校・大学生	440円 (300円)	320円 (200円)	100円 (50円)	1,000円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	300円

(注)：()内は団体料金(20名以上)

未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。次の日は入館料が無料です。

- 5月4日(みどりの日) ●6月5日(環境の日)
- 11月13日(茨城県民の日) ●春分の日
- 高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。)

【休館日】

- 毎週月曜日
- ※12月27日(月)～1月1日(土)は、休館となります。
- ※1月3日(月)は開館し、振替休館はありません。
- ※1月10日(月)は開館し、翌日が休館となります。

